

## 低下する女子中高生の性道徳観

2005年12月26日(月)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: vermeer@pa3.so-net.ne.jp

### ～要 旨～

日本で「援助交際」が活発化するようになったより根源的な背景には、最近になって女性の性道徳が変わってきたことがある。若い女性の性道徳の変化が「援助交際」問題の解決を難しいものとしている。法によって「援助交際」に関わる業者や性を買う側である大人への規制をいくら強化したとしても、性売る側である女子中高生のモラルの低下を防がない限り、過去の例が示すように規制はかえって売春を目にふれにくくするだけに終わってしまうだろう。「援助交際」を断絶する唯一の方法は、家庭における道徳教育、学校における指導・啓蒙を徹底し、女子中高生一人一人に確固とした道徳基準を確立させることではないだろうか。

日本の女子中高生が行う「援助交際」がいかに特殊な売春形態であるかを明らかにするため、発展途上国で一般に行われている少女売春の実態を眺めてみよう。ここでは、発展途上国の代表例としてタイを取り上げる。家計を助けるために貧しい農村から都市部に出稼ぎに出てきた少女の大半は結局、道徳的な苦痛を伴いながらも、高収益がえられるという理由から、やむを得ず繁華街などで売春産業に従事することになってしまう。そして、彼女たちが売春によってせせと稼いだお金の多くは、農村部で貧しい生活にあえぐ家族に仕送りされることになる。92年12月にILO(国際労働機関)がタイの売春婦52人を対象に実施したインタビュー調査の結果によれば、売春宿で働いている女性の場合、収入の実に39%を家族への仕送りにあてており、自分自身のために使う食事代や洋服代が占める割合はそれぞれ全収入の15%、14%にすぎない。

家計を助けるためにやむをえず売春を行うタイの少女と、自分が遊ぶための小遣いを稼ぐために売春を行う日本の女子中高生の間には、モラルの面で大きな違いがあるといえよう。

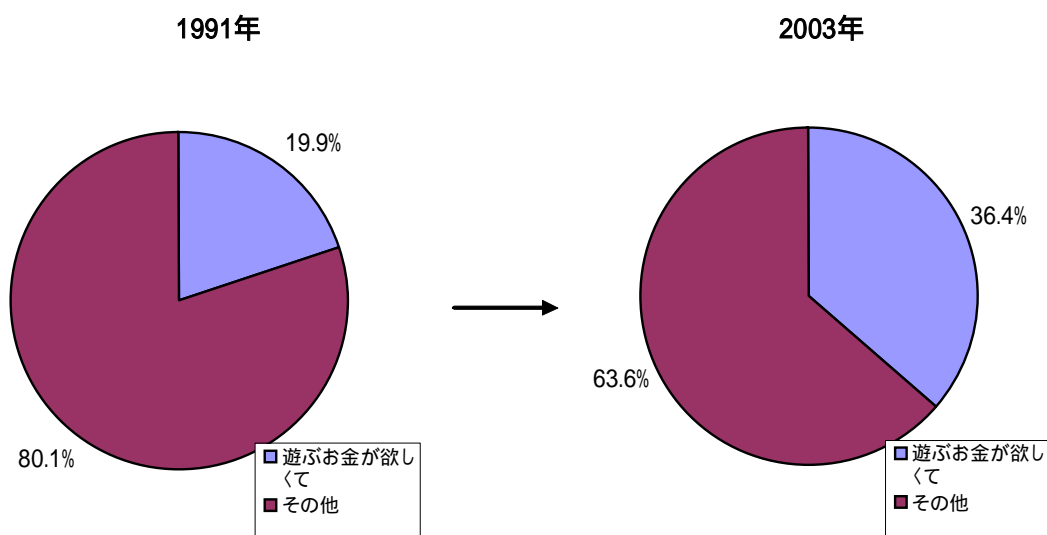
### (低下するモラル)

日本で「援助交際」が活発化するようになったより根源的な背景には、最近になって女性の性道徳が変わってきたことがある。一昔前までは若い女性が売春をする場合、そこには親が事業に失敗して多額の借金を抱えているなどといった生活費を稼ぐための止むをえない事情があった。しかし、現在「援助交際」にはげんでいる女子中高生の経済環境をみると、特別に家庭が貧しいとかお小遣いに困っているということはない。彼女たちは単に高級ブランドのバッグや洋服を買ったりするお金欲しさから気軽に自らのカラダを売っているのだ。もちろん、なかには暴力団などにだまされ、売春を強要されているものもいるがその数は多くない。警察庁の資料により「性の逸脱行為で補導・保護された女子」が売春に関わった動機をみると「遊ぶお金が欲しくて」を挙げる者が91年の19.9%から2003

年には 36.4%まで拡大している(図表)。たしかに、女子中高生で 5 ～ 10 万円程度が相場ともいわれる「援助交際」は、手っ取り早くお金を稼ぐには魅力的な方法であるようにも見える。

こうした若い女性の性道德の変化が「援助交際」問題の解決を難しいものとしている。法によって「援助交際」に関わる業者や性を買う側である大人への規制をいくら強化したとしても、性を売る側である女子中高生のモラルの低下を防がない限り、過去の例が示すように規制はかえって売春を目にふれにくくするだけに終わってしまうだろう。「援助交際」を断絶する唯一の方法は、家庭における道德教育、学校における指導・啓蒙を徹底し、女子中高生一人一人に確固とした道德基準を確立させることではないだろうか。

図表 「援助交際」の動機



(出所) 警察庁資料より作成

(注) 性の逸脱行為で補導・保護された女子にたずねた動機。その他の理由には「セックスが好きで」「興味から」などが含まれる

### (タイの少女売春と日本の援助交際の違い)

日本の女子中高生が行う「援助交際」がいかに特殊な売春形態であるかを明らかにするため、発展途上国で一般に行われている少女売春の実態を眺めてみよう。

ここでは、発展途上国の代表例としてタイを取り上げてみる。タイの地下経済は地上経済に匹敵するほどの規模で存在しているともいわれ、実際、地下経済が名目GDP比で 71.0%に達するとの推計結果も報告されている(89～90年平均)。地下経済のうち非合法所得は、違法賭博、人身売買、武器やディーゼル軽油の密輸などで構成されているが、そのなかで売春産業が 2 ～ 3 割を占めている。アメリカの場合、地下経済に占める売春の割合は 5 %程度、非合法所得のなかだけでみても 9 %程度であるから、タイの売春産業のウエイトが先進諸国と比較していかに高いものであるかが分かる。売春産業は他の小売・サービス産業とも密接に関わっており、売春宿やマッサージ・パーラーへのたばこやアルコール類の売上はこれらを販売する企業にとって重要な収益源となっている。

毎年 20～30 万人の売春婦が国内で活動しているともいわれるタイの売春産業は、ベトナム戦争の頃から急速に成長し始めた。ベトナム戦争中、パタヤ地域では、アメリカ兵の保養地としてホテルやレストランといった観光業が栄え、それに伴い売春産業も発達していった。パタヤで発達した売春産業はその後、バンコクなどタイ各地に広がり、売春の形態も多様化していった。タイ政府の資料から形態別に売春婦の数をみると、92 年のデータでは、売春宿で働く者が全体の 27.6%、マッサージパーラーが 13.8%、ナイトクラブやゴーゴーバーなどが 8.7%となっている。また、最近の傾向としてディスコやゴルフクラブ、パブなどに売春婦が多く集まるようになってきている。

タイで売春産業が発達した根本的な原因としては、南部と北部の間で経済格差が広がったことが挙げられる。タイでは 1970 年代から 80 年代にかけて、南部の大都市において工業化が急速に進展した。工業部門の賃金は農業部門のそれを大きく上回っていたことから、農業中心の北部と工業化が進んだ南部との間に大きな経済格差が生じ、それまで農業労働に従事していた若者たちの多くは高い賃金を求めて南部の大都市へ流入していくこととなった。機械化の進展によって農村部に多数の余剰労働力が発生したこともそうした流れを加速させた。現在でも雇用機会南部の大都市に集中しており、北部や東北部に経済的貧困が集中している。1998 年のデータをみると、タイの貧困ラインは 1 人あたり月収入 878 バーツであったが、貧困者の割合はバンコクで 0.6%にとどまる一方、北部では 9.1%、東北部では 14.6%にも達している。

しかし、農村から出てきた労働者の多くは、教育水準の低さなどが障害となって統計的に雇用が把握されるフォーマルセクターには移動できず、多くの者が地下での経済活動を余儀なくされている。家計を助けるために貧しい農村から都市部に出稼ぎに出てきた少女の大半は結局、道徳的な苦痛を伴いながらも、高収益がえられるという理由から、やむを得ず繁華街などで売春産業に従事することになってしまう。工業化の過程でタイ南部に富裕層が誕生するようになったことも、売春産業に対する需要を増大させ、南部における売春婦の増加につながった。実際、97 年時点で売春婦の 57.6%はバンコクや南部地域に集中している。そして、彼女たちが売春によってせつせと稼いだお金の多くは、農村部で貧しい生活にあえぐ家族に仕送りされることになる。タイでは、毎年 300 万ドル近くのお金が売春婦によって都市部から地方部へ送られるといわれる。また、92 年 12 月に ILO (国際労働機関) がタイの売春婦 52 人を対象に実施したインタビュー調査の結果によれば、売春宿で働いている女性の場合、収入の実に 39%を家族への仕送りにあてており、自分自身のために使う食事代や洋服代が占める割合はそれぞれ全収入の 15%、14%にすぎない。

家計を助けるためにやむをえず売春を行うタイの少女と、自分が遊ぶための小遣いを稼ぐために売春を行う日本の女子中高生の間には、モラルの面で大きな違いがあるといえよう。